

ウクライナが中国に提供した空母関連技術（漢和の極秘情報を公開）

漢和防務評論 20140324（抄訳）

軍事貿易特集

ウクライナ社会の動揺が軍事貿易に与える影響

平可夫

阿部信行

（訳者コメント）

ウクライナ社会の動揺が対中軍事技術協力にどのような影響がありそうか？漢和防務評論の記事を紹介します。

中国の軍拡の目玉である”国産空母の建造”やそのための事前学習として不可欠な旧ソ連空母”ワリヤーグ”の修復、さらに艦載機 J-15 の開発は、ウクライナの支援なくしては不可能であったということです。このほかにも中国海空軍の近代化に不可欠な電子機器、航空エンジン等でウクライナの支援を受けています。

平可夫氏は、中国は現在までにウクライナから必要な技術は全て入手していると述べています。この点から推測するとロシアのクリミア併合は、プーチンと習近平との間で事前の了解があったと考えざるを得ません。

ウクライナ社会の官民はみな西側指向なのだろうか？親ロシア勢力との衝突の拡大、クリミアのロシア回帰の可能性、リボフ州の独立運動の推移、東部ウクライナの親露傾向、これらは高度に注目しなければならない。この種の衝突が長期間持続するならば、欧米の関心と介入を招く可能性がある。歴史は繰り返す。

ウクライナの対中武器輸出を問題視した米国政府は、ウクライナに圧力をかけはじめた、と最近のウクライナメディアは報道している。実際、圧力はこれが初めてではない。すでに 2001 年、KDR はウクライナ軍事工業部門の主管に対し類似の問題を質問した。すなわち中国の軍事装備の相当多くの動力系統がウクライナ製であると。ウクライナ消息筋は、当時、ウクライナは自らの国家利益を有するとし、2001 年のウクライナは経済危機を完全には脱していないことを強調した。

過去 10 年間、中露の軍事技術協力が低迷するなか、ウクライナと中国の軍事技術協力関係は相当密接であり、双方の年間軍事貿易額は 5 億ドル以上であった。ウクライナの航空エンジンが無ければ、中国陸軍航空部隊の MI-17/171 系列のヘリは飛べなかった。また K-8 型及び L-15 型練習機は生産できなかった。ウクライナの大きな社会的動揺は、ウクライナ経済の崩壊を引起すのか？ウク

ライナの軍事工業生産にどの程度の影響があるのか？注目しなければならない。このほか一旦ウクライナに親欧米政府が成立した場合、EU 加入への呼びかけが強まり、米国の政治的圧力を受けるはずである。

今のところ中国がウクライナから獲得した軍事装備に ZUBR 型大型エアクッション艇があり生産は半分程度進んでいる。中国は 4 艘建造する予定でノックダウン方式を採り、中国は自ら組み立てを開始している。最初はウクライナが提供するガスタービン・エンジンとその他の技術が不可欠であった。この事業は、現在の軍事協力事業の中では最大事業の一つである。

K-8、及び L-15 型練習機は、継続してウクライナ製の航空エンジンを使用している。L-15 は、現在すでに輸出先を獲得している。中国空軍は、この事業を JL-10 事業と称し、今後は大量生産に移行する。

MI-17 及び MI-171 型ヘリが使用する 2 種類のターボシャフト・エンジンは、ウクライナ製であり、KV-2500 を装備する中国向け輸出の MI-17 (V-7) は、ヘリ本体はロシアの KAZAN で生産され、エンジン設計は、ロシアの KLIMOV 設計所である。したがってこれは 3 国間の軍事貿易になり、全体契約は中国とロシアの間で行われ、エンジンに関するサブ契約がロシアとウクライナの間で結ばれる。ウクライナ社会の動揺は、ロシアとウクライナ間の軍事技術協力が影響を与える可能性があり、間接的だが第三国にも影響がある。現在のロシア、ウクライナ及び中国との関係に類似した関係は、すでにソ連時代から存在した。ロシアとその他の国家との軍事協力はウクライナの支持なくしては不可能であった。多くの軍事装備品のサブシステムがウクライナで生産されていたからである。例えば、SU-27S が使用する R-27 型空対空ミサイルはウクライナ製であった。中国は、SU-27 の大規模修理についてウクライナに依存していた。

中国とウクライナの軍事技術協力は、なぜ長く続くのであろうか？ウクライナの支援がなければ、中国の最初の空母は造れず、最初の艦載機も造れないからである。

その理由は以下の通り。

1. ウクライナと中国は、政治的対立がない。したがって技術輸出に制限が加えられることがない。中国への”戦略兵器の輸出制限”政策が存在しない。空母、KH-55 型戦略巡航ミサイル等は戦略兵器であるが、全て中国に輸出された。これはロシアの不興をかった。

2. 軍事技術の開放度がロシアよりも高い。白ロシア及びウクライナの対中軍事技術協力の度合に関して、両国は、中国に対し技術的優勢を保持しようとする姿勢が小さく、ロシアのように”中国に対し 10 年間の軍事技術優勢を保持する”との政策はない。ウクライナの対中輸出兵器は多くが現役兵器であり、ウクラ

イナが自ら保有していない新型兵器も含まれている。

3. ロシアに比べ、価格的に有利である。特に修理サービス費が安い。現在、中国は、KA-27/28 型ヘリ、各種ヘリ用エンジン、練習機用エンジン、AL-31F エンジンの整備でウクライナの助言と技術支援を受けている。中国国産の最新型 Z-20 型ヘリのエンジンもウクライナの KV2500 を使用している可能性がある。

2013 年以降、中国とウクライナの軍事技術協力の分野が広がり、双方の戦車製造工業部門の協力が進行している。中国の主戦タンク MBT-2000 はウクライナ製の 6TD2 型ディーゼルエンジンを使用しており、中国は現在も輸出用戦車に装備するため輸入を続けている。このほか中国北方工業公司是ウクライナで生産されている新型反応装甲技術を求めている。

海軍方面の協力は、かなり広く、細部にわたっている。KDR が掌握した資料によると、現在、7つの事業が進行中である。

1. ZUBR 型大型エアクッション艇の重要技術

これらの技術は KAT 1 E 型推進コントロール技術、AV-98 型 4 枚プロペラ、AU-4 型コントロールシステム、M-79 型ガスタービンとの組み合わせ技術を含んでいる。輸入協力会社は、ウクライナの GPNPKG ZORYA-MASHPROECT 工場である。またここで触れなければならないのは、中国海軍が自力生産している 80 トン級 726 型（ウクライナの名称）もウクライナの技術支援を受け、ガスタービンエンジンは ZUBR と同じである。

2. 中国海軍に提供する電子戦、無線電信技術

3. 新型レーダーにグレードアップする際の技術支援

054A 型ミサイル駆逐艦に搭載されているロシア製をコピーした FREGAT 搜索レーダー、MINERAL-ME 型火器管制レーダー等々の関連事業はウクライナの KVANT 設計局の技術支援を受けて迅速に行われている。前者の技術的な図面は中国保利会社が輸入した。

4. ソナーシステム関連技術

ソナー技術の協力関係は相当長期間にわたっており、これら技術は中国の原子力ミサイル潜水艦でも使われている。

5. パッシブ偵察システムの共同研究

6. 潜水艦技術

潜水艦技術の協力関係も相当長期間にわたっている。保利公司是ウクライナから D-42 型ディーゼルエンジンを輸入し KILO-636 潜水艦に搭載した可能性がある。

7. 空母の関連技術

空母の生産領域では、“遼寧”の動力系統を含め、すべてウクライナの機器を使用している。これらの機器には、蒸気タービンに用いる **GTZA-523** 型変速機が含まれる。したがってウクライナ情勢の動揺が続けば、中国国産空母の生産にどのような影響が出るか注視する必要がある。

中国空母が使用するボイラーの技術はウクライナのものであり、技術移転はハルビンのボイラー工場で行われた。これは **KDR** がすでに報道した。中国政府の報道によると、中国はワリヤグ（遼寧）空母のボイラーを自力で修復したとしているが、**KDR** が入手した情報によると、実際はウクライナのアドミラル・マカロフ船舶大学が修理手順書を提供したのである。この大学は、セバストポルに所在し、ソ連時代、空母用ボイラーの発祥地であった。空母“遼寧”のボイラーは、同大学が設計した **KVG-4** 型ボイラーであり、ハルビンボイラー工場が全ての設計図を入手した。ウクライナの技術支援が無ければ、中国の国産空母は、迅速に建造に着手することは不可能であり、“遼寧”を速やかに修復することも不可能であった。空母の動力は、ボイラー単体だけでなく、ボイラー＋ガスタービンエンジンの組み合わせである。後者の技術はウクライナのものである。ウクライナの **CHERMONORETS** 中央設計局が大型空母用エンジンの設計を請け負っている。中国とウクライナは、共同作業グループを設立した。事業名称は“海事高圧ボイラー系統”である。ウクライナは、全ての設計図と一部の機器、例えばタービンプレード等を提供した。

052C 型ミサイル駆逐艦のフェーズド・アレイ・レーダーは、ウクライナで設計されたものであろうか？西側メディアがまず最初に報道した。**KDR** の追跡調査によると、この事業は進行中であり、ウクライナの **KVANT-RASDILOKATSIYA** 設計局が中国に設計図を提供した。事業名称は、“三軸艦載 2 元フェーズド・アレイ・レーダーと電子機械方位回転初歩設計図”である。一部の技術は **DELTA-M** 艦載レーダーからのものである。また同設計局は、中国にオーバーホライズン・レーダーの設計図を輸出した。中国はこのレーダーを“長江”の名称で艦船に搭載し長距離弾道ミサイル発射の追跡作業に用いている。このほかウクライナは中国に **SR-210** 型レーダーを提供した。

956E/EM 型ミサイル駆逐艦の修理については、またウクライナと関係がある。従来からこの種の駆逐艦の修理サービス手順書は、一部ウクライナが提供していた。**KDR** は、以前に **052B/C** 型駆逐艦が使用する **UGT-25000** 型ガスタービンエンジンはウクライナの技術移転を受けたものであり、現在は中国で組み立てられている、と報道した。しかし修理手順書は全てウクライナが提供したものであり、**TD-1500** 型電動機を含む一部の機器は、依然ウクライナが提供している。

ウクライナはまた中国に魚雷システムを提供している。典型的な事業は

SHKVAL 型水中高速魚雷で、キエフの PETROVSKY 自動化技術工場が中国に DK-26 型魚雷コントロールシステムを提供している。ウクライナは、ソ連時代からソナーの重要な生産地であり、同国は中国に多くのソナー技術を提供している。中国に提供された BOSFOR 船体ソナーは、中国からパキスタンに輸出された F-22P 型護衛艦に装備されている。したがってウクライナの支援が無ければ、中国海軍の近代化も空母建造もあり得ない。

今後はどのように進むのか？たとえウクライナに親欧米政府ができたとしても、中国とウクライナの軍事技術協力はそれほど影響を受けないと KDR は考える。その理由は、

第一、中国とウクライナの軍事的結び付きはすでに数十年を経ており、短期間で中断することはできない。また協力の大事業は基本的に終了しており、一部の小型技術の協力事業については西側特に米国であっても干渉し難い。

第二、20 年以上の軍事技術協力を通じて、中国はウクライナから絞り採れる油はみな絞り採った。特に空母、艦載レーダー、エアクッション艇、軍用大型輸送機を筆頭に、導入すべきものは全て導入した。将来、さらに大きな軍事協力事業はもはや考えられない。

第三、中国・ウクライナ軍事協力の次の段階の難点は、もし中露が S-400 地对空ミサイル、SU-35、新型潜水艦、等の大型軍事協力事業を立ち上げたとしても、これらの装備品はソ連崩壊後に生産された最新装備であるため、ウクライナは修理許可証も設計図も持っていない。したがって中国は新時代のロシア式新型装備についてはウクライナの支援を受けようにもそれは不可能である。

ただ航空エンジンの一事業についてだけ、中国はウクライナの継続した支援を必要としている。

以上